今日の時代における宗教批判の克服学（12）

非宗教者との宗教者の対話と協働の試み

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

宗教対話シンポでの質問から

去る11月7日、財団法人国際宗教研究所の主催で「現代宗教と対話の精神」というテーマのシンポジウムが大正大学で開催され、私もパネリストの一人として参加した。とても充実した内容のシンポジウムであったが、後半の討論の時間で会場から私宛に、「とくに宗教を信じていない一般市民と宗教者とが、人生や社会の問題について対話するためにはどうしたらよいのか」という質問があった。

これは、宗教といっても、伝統宗教と新宗教とではずいぶん状況が異なる問題でもあろう。伝統宗教では、教会や寺院に直接行ってそこで牧師や僧侶とそのような話をしても、それほど違和感はない。多少、上から目線のお説教めいた言い方はされるかもしれないが、一般市民の側では、そうした対話をしたからといって、当該宗教の布教や勧誘を強要されることはないため、比較的安心してそうした宗教施設に行けるところがある。

ところが新宗教の場合、なかなかそうはいかない。「○○の問題で悩んでいるのですが……」と、その宗教施設の門を叩いたら、宗教者の側は、待ってましたとばかり喜ぶだろう。そのような訪問者は新しい信者候補にしか見えないからである。そして、その宗教者は、人生や社会の究極的な解決には、我が教えしかないということを力説するだろう。相談相手が普通の信者なら大丈夫だと思って、そうした話を持ちかけても同様に教えを説かれるだけである。聖職者と平信徒の区別が基本的にないのが新宗教の特徴だからである。これでは全く一方的な布教伝道であって、とても対等な立場での対話にはならない。一般社会において、新宗教が敬遠され警戒されるのも故なしではないのだ。

この行き違いの原因は、お互いに対話の場面を誤ってしまったところにある。市民が宗教者の活動の場に飛び込むのではなく、宗教者が市民社会の現場に出ていって、当該の社会問題について、これを共通課題として取り組んでいくべきなのだ。そうしたとき、はじめて無宗教者と宗教者との対話も成立する。この対話は、世俗を超えた境位に立つ宗教側にとっては、自ら信じる教えをそのままの形で語れず、宗教者本来の役割をなかなか果たせないため、逆に違和感を感じることがあるかもしれない。

しかし、宗教者ならではの役割があるとすれば、それは他のどんな職業の人々にもまして一人ひとりを大切にできるということではないだろうか。このこと以外の宗教者の社会的独自性は、取り立ててどこにもないとすら私は思うのだ。もし仮に、一人ひとりの人間を大切にしていない宗教者がいたならば、その宗教者は宗教者としての社会的存在意義を満たしていないと言えるのではないか。実際のところ、人々が外部から宗教を高く評価するのは、その宗教を信じている人々が心底喜んで生きているか、また人々のために溌剌（はつらつ）と献身しているかによるのだから、ことさら宗教独自の特殊な要素を持ちだす必要はない。

例えば、ボランティア（実践奉仕活動）をするのに、だれがやろうと立場の高低などはないだろう。かりに「あなたの職業は？」と聞かれたときに、「保険会社のサラリーマンです」「飲食店を経営してます」などと答えるような感じで、「○○教の教会長です」「□□宗の布教師です」と答えることができ、それが相手に警戒心なく受け入れられるようでなくてはならない。

古くからその土地にある寺院や神社などとは異なり、新宗教が信頼される条件があるとすれば、何よりもまず、ふだんから社会の中に溶け込んで、布教伝道抜きで地域の人々と協働していることである。ふだんから信頼を得ていれば、なにか緊急事態が起きても、ただちに頼りになる相手として、その宗教者や宗教施設の存在が思い浮かぶはずだ。そして、それが結果的には、広い意味での布教伝道につながることにもなるのである。

「大阪希望館」支援の取り組み

ここで紹介したいのは、私も現在、多少の関わりを持って取り組んでいる「大阪希望館」（住まいをなくした人の再出発支援センター）の運動である。私は、この運動の中に非宗教者と宗教者との対話、いや対話を超えて協働する姿を見る。

大阪希望館とは、派遣切りやリストラなどで仕事や住まいを失った人や、社会的困難を背負って支援がなければ野宿生活に陥らざるをえない人たちを主な対象として、相談機関や支援のための居宅等を備えた施設で、今年（2009年）6月に開設された。その設立の狙いは、市民の力で仕事や住まいを失った人の就労や生活を促進し、人生の再出発を支援する活動を通じて、市民主体のセーフティネット作りを目指すところにある。

この名称は、作家・難波利三の小説『大阪希望館』から、難波氏の快諾を得て付けられた。この小説は、終戦直後の大阪で戦災孤児や母子、高齢者、帰る家を失った復員兵たちを保護した実在の施設「梅田厚生館」とその館長をモデルにした作品である。公立の施設だったが、当時は公費が乏しかったため、その運営費の多くが館長の才覚や市民の善意で賄われたのだった。大阪希望館という名前には、市民の力によって絶望した人たちに再び生きる希望を持ってもらうという思いがこめられている。

大阪希望館の運動には、さまざまな市民団体に混じって、伝統宗教あるいは新宗教の多くの関係者たちも、個人あるいは組織で関わっている。そして複数の宗教がそのように関わることで、かえって宗教者たちも一般の人々と同じ目線に立って、純粋に市民運動に取り組むようになっている。この運動の中核になってきたのが、超宗派による釜ケ崎のホームレス支援グループの「野宿者問題を考える宗教者連絡会（Soul in 釜ケ崎、略称ソルカマ）」（2003年発足）であった。大阪希望館の運動はまだ始まったばかりの取り組みであり、今後の展開によっては、宗教界全体の刷新の機運をもたらす運動にもなるだろう。

11月28日には、カトリック玉造教会を会場にして、大阪希望館の支援集会「『思いやりのまち』大阪を創ろう!! 市民フォーラム」が開催される。フォーラムは3部構成で、第1部は廣畑涙嘉（るか）牧師によるトーク＆ライブ「明日はきっと訪れる―『痛み』を抱えて生きているすべての若者たちへ」、第2部は「大阪希望館の現状紹介」、第3部はパネル「『思いやり』社会の実現へ向けて」である。私はこの第3部の総括コメントを担当することになっている。関心のある方は、同フォーラム実行委員会事務局の金光教大阪センター（電話:06-6121-2323 e-mail:osaka@konkokyo.or.jp）までご連絡いただければ幸いである。